2016 年 11 月 18 日

（お話の構想－その１－）

株式会社日本計量新報社代表取締役　横田俊英

明治の度量衡に関わった人々のお話です。

１、お話は浅井長政と佐々木六角氏の争いから始まります。

彦根市に肥田という地域があってこの地域を支配していたのが高野瀬秀隆です。高野瀬秀隆は、六角氏に仕えて最前線を守っていたが、六角氏を裏切って勢いに乗っている浅井長政に就き（臣従）ました。怒った六角義賢・義弼親子は肥田城を攻めます。川の水を使った水攻めで「肥田城の水攻め」として戦史にあります。兵糧尽きてここまでかというときに梅雨の大雨であふれた水によって堤が切れたために、水攻めから逃れます。

浅井長政が湖北の地を完全支配し近江一円に勢力を広げます。その後に信長の妹のお市のを正室に迎えます。織田信長が今川義元を桶狭間で倒したのが「肥田城の水攻め」があったころです。

戦国史に主役として登場する信長であり、浅井長政です。豊臣秀吉の子、秀頼を生んだのはお市の子の淀君です。お市の子は徳川家に嫁いでおります。

肥田城主の高野瀬秀隆とその一族の歴史記録は一端途絶えます。肥田城の直ぐ近くに高野瀬城がありました。ここは高野瀬秀隆の城であったのです。高野瀬城があった地域はいまもその名をとどめております。

時は下り、ペリーの浦賀来航をきっかけにして尊皇と攘夷の考えが大きくなります。吉田松陰はペリーの船に乗り込んで密航を図って失敗します。

徳川家康の重臣の井伊一族は赤備えで勇猛でならします。彦根藩主となってた井伊一族の子孫の井伊直弼はペリー来航に伴う日米修好通商条約に調印し、周囲の反対を押し切って将軍継嗣を徳川家茂にします。朝廷の了解を得ない日米修好通商条約に調印は不当をいう考えで吉田松陰は幕府の使者を襲撃する計画たてますが、これが漏れて失敗します。

尊王・攘夷派など反政府不勢力への弾圧が始まります。安政 5 年（1858 年）から安政 6 年（1859 年）の間になされれた「大弾圧が安政の大獄」です。吉田松陰は処刑されます。

死刑ならびに獄死した者は次のとおりです。

吉田松陰　長州毛利大膳家臣、斬罪
橋本左内　越前松平慶永家臣、斬罪
頼三樹三郎　京都町儒者、斬罪
安島帯刀　水戸藩家老、切腹
鵜飼吉左衛門　水戸藩家臣、斬罪
鵜飼幸吉　水戸藩家臣、獄門
茅根伊予之介　水戸藩士、斬罪
梅田雲浜　小浜藩士、獄死
飯泉喜内　元土浦藩士・三条家家来、斬罪
日下部伊三治　薩摩藩士、獄死
藤井尚弼　西園寺家家臣、獄死
信海　僧侶、月照の弟、獄死
近藤正慎　清水寺成就院坊、獄死
中井数馬　与力、獄死

隠居・謹慎を命ぜられた者は次のとおりです。

一橋慶喜　一橋徳川家当主(徳川慶喜)
徳川慶篤　水戸藩主（9 月 30 日に免除）
徳川慶勝　尾張藩主
松平春嶽　福井藩主
伊達宗城　宇和島藩主
山内容堂　土佐藩主
堀田正睦　佐倉藩主
太田資始　前掛川藩主
川路聖謨　江戸城西丸留守居
大久保忠寛　江戸城西丸留守居
中山信宝　水戸藩家老（9 月 27 日に免除）
松平忠固　上田藩主
本郷泰固　川成島藩主・若年寄（1 万石から 5 千石へ減封、川成島藩は消滅）
土岐頼旨　大目付・海防掛
石河政平　一橋徳川家家老

安政の大獄における反対勢力への弾圧の規模と内容を物語るのが上のことでわかります。

徳川幕府のなかにあって水戸は特別な状態にあります。水戸学は尊王攘夷を基調にしていて、

水戸学を学びに各地から水戸に遊学する者が多数ありました。江戸の地でもこの流れを汲む塾がありました。松下村塾の吉田松陰は彼の地で過激な思想を塾生に説きます。ここで学んだ者たちが維新の志士として働き、明治政府の要人となって近代日本をつくっていきます。

藩に被害が及ばないようにするために脱藩した身分にしていた水戸浪士らが雛祭りの祝いにために登城する井伊直弼を襲って倒します。井伊藩邸から桜田門までは 600 メートルでした。急襲された護衛の者は刀を抜く間がないことから素手で刃を握ったりしたために指が落ちて、腕も何本か転がっておりました。

首を落とされた井伊直弼は江戸の江戸藩邸に担ぎ込まれ、縫い合わされます。幕府には負傷とだけ伝えられます。襲撃をみていた別の藩邸の人々は井伊直弼が撃たれたことを知っていたのです。襲撃を受けて討たれるということは大失態であります。備えの者も鞘袋で覆っていたりして、急襲への対応がなっておりません。一人だけまともな対応をして、直弼の首を持って逃げようとした切り殺します。井伊家では「主君は負傷し自宅療養中」と事実を秘した届を幕閣に出します。直弼の首は彦根藩邸で藩医の岡島玄建により胴体と縫い合わされました。

井伊藩邸は襲撃の場を血が付いた雪もろともかき取って何もなかったようにします。

井伊家の一大事です。彦根の藩邸に急報して対応策を練らなくてはなりません。

馬を使ったか、籠を使ったか、国元に知らせる任に当たった者がおります。

彦根藩士の高野瀬喜介です。

高野瀬喜介は彦根市肥田町辺りを治めていた肥田城主の高野瀬秀隆の子孫であります。この地でると高野瀬一族は命脈を保って彦根藩に仕えていたのでした。

ペリーの来航、安政の大獄、桜田門外の変のあった頃から幕末とされます。吉田松陰は幕末において重要な位置を占める人物です。

肥田城主の高野瀬秀隆の子孫は井伊直弼の家臣として幕末の歴史舞台に登場したのです。高野瀬喜介です。

明治の理学教育の黎明期に活躍した人に寺尾寿がおります。寺尾寿は東京帝国大学仏語物理学科を卒業しフランスに留学中に日本で最初の理学士の称号を得、フランス留学から帰ると 28 歳で東京帝国大学理科大学教授兼東京天文台台長の職に就きました。寺尾寿は日本のメートル原器

をフランスの国際度量衡局から持ち帰った人です。

寺尾寿は後に「物理学校」を東京帝国大学の物理教員や卒業生ち一緒につくります。当時の東京帝国大学総長の浜尾新は「寺尾の物理学校」だからということで特例で実験機器の貸し出しをしたり卒業式に出席して祝辞を述べることをならわしにしておりました。

物理学校は 1881（明治 14）年 9 月 11 日に東京物理学講習所として開校しております。それから 13 年を少し経た 1894（明治 28）年 2 月 17 日の卒業式で東京帝国大学総長浜尾新はこの日の祝辞で「東京帝国大学理学部を初めて卒業した 20 余名の本邦初の理学士たちが物理学校を設置し」と述べております。物理学校の卒業式には教育界の大物が多数出席していたため懇親会は理学分野の学者の社交場となりました。ここには東京帝国大学理科大学学長の菊池大麓（東京帝国大学第 5 代総長）、同教授山川健次郎、田中館愛橘の姿がありました。

山川健次郎は 1901（明治 34）年 48 歳で東京帝国大学総長となった物理学者（1888〔明治 21〕）年東京帝国大学初の理学博士号を授与された白虎隊の生き残り）。菊池大麓は度量衡行政に研究・検定業務の責任者として一時関与。田中館愛橘は日本人初の国際度量衡委員であり国際舞台で活躍しました。

物理学校で熱学を担当していたは寺尾寿の一年後輩の人であり、この人は農商務省に喚ばれて権度課課長をしていまて夜に物理学校の教壇に立っていたのです。寺尾寿はこの人を「物理学普及にかかる同志」と言っておりました。この人は物理学校創立に名を連ねております。

初代の農商務省権度課長になったこの男は第一次度量衡法の制定に大きな働きをします。

寺尾寿の一年後輩の初代の農商務省権度課長になったこの男は寺尾寿に「度量衡制度はできたがわが国には度量衡機器の検定をしたり、製作するさいの知識を有する者が決定的に不足しているので、物理学校に度量衡科を設けてその人材を養成してほしい」と物理学校に「度量衡科」の設置を熱心に要請しておりました。

「物理学普及にかかる同志」と言う寺尾寿はこの男と同じ気持ちであるのです。むしろこの男を激励していたのです。寺尾寿は「度量衡科の設置も国にまかせていたら何時になるかわからない、物理学校だからこそ臨機応変に対応できるし、また即戦力になる人材の養成もできる、また学校経営上も損はない」と「度量衡科」をつくったのでした。

度量衡官吏の養成はのちに国の機関に移されることになるが、物理学校度量衡科修了の大阪府権度課長の立場から度量衡行政に手腕をふるった関菊治などを排出しました。

大阪府権度課は東京からは独立しているような様相があって関菊治は権度課長に劣らない活躍を度量衡行政でいたします。

日本の最初の国際度量衡委員になる田中館愛橘に、寺尾寿は「おい、元気でやっているか」と言葉をかける仲でした。

東京帝国大学理科大学学長の菊池大麓（東京帝国大学第 5 代総長）、同教授山川健次郎、田中館愛橘、寺尾寿に混じって日本の理学教育の幹の分野にあって度量衡行政の責任者の地位にこの男はあったのです。

次はこの男のことです。

1852 年（嘉永 5 年）に近江国彦根に彦根藩士の子として生まれます。
1871 年（明治 4 年）士族の教育支援制度の「貢進生」としてり、大学南校に入学します。大学南校は後の開成学校になります。貢進生制度が廃止されたので私費で開成学校に入学してこれを終えます。
1879 年（明治 12 年）7 月に東京大学仏語物理学科第 2 期卒業します。卒業後は駒場農学校で教鞭をとります。
1881 年（明治 14 年）、東京物理学講習所の創立者の一人となります。「寺尾の物理学校」です。
1883 年（明治 16 年）、東京物理学講習所所長を辞します。
1885 年（明治 18 年）、東京物理学校維持同盟員となります。
1886 年（明治 19 年）、農商務省工務局権度課長となります。
1891 年（明治 24 年）、この男が権度課長のもと度量衡法が制定されます。
1894 年（明治 27 年）3 月、大日本度量衡協会のちに日本度量衡協会、現在は日本計量振興協会、の設立に伴い副会長となる。会長は農商務大臣。
1907 年（明治 40 年）、退官し大日本度量衡株式会社を設立。

さてこの男とは誰か。

桜田門外の変を国元に知らせた彦根藩士の高野瀬喜介の子です。そして肥田城の水攻めの高野瀬一族の子孫であります。彦根藩のあった彦根市は近年まで滋賀県における度量衡器の製造の有力産地でありました。江戸期の歴史がそこにあったのです。

彦根藩士の高野瀬喜介の子がこの男、高野瀬宗則であります。

井伊直弼の日米修好条約の調印と吉田松陰による朝廷への使者の殺害予告、井伊直弼による安政の大獄と吉田松陰の処刑、そして水戸藩士による井伊直弼の襲撃「桜田門外の変」と国元への連絡の使者としての高野瀬喜介の子の高野瀬宗則がおりました。

吉田松陰の朝廷への使者を襲うことで幕閣の非を咎める行動は、これより先 30 年々ほど前におきた相馬大作事件に重なるところ大であり、松陰は北国視察のおりに弘前藩藩主を襲おうとしたことを現地で聞いて内容を分析しております。外患たるロシアに対して南部も弘前の津軽も一緒になって対応しなくてはならないのに、津軽が一人よい子になろうとするのはいけないとして、相馬藩主が参勤交代の帰途のおりに果たし状を出して襲おうとした。未遂に終わるのも、後に処刑されることも吉田松陰の事件と瓜二つであります。

相馬大作事件は南部藩主への忠誠であるとして第２の忠臣蔵として江戸末期に講談本になりますが、水戸学にも由来する攘夷思想であったのです。

相馬大作の姉の子が南部藩福岡におりました。

田中舘愛橘の父であります。愛橘の父は南部藩支藩の福岡にあって兵法指南である武家でした。水戸に遊学して水戸学を学ぶなどして、福岡に戻っては武家などの子弟を教育する私塾を開いておりました。西郷隆盛も鹿児島では私塾を開いておりました。吉田松陰の私塾である松下村塾は明治の偉人を輩出しました。

田中舘愛橘は武士道をたたき込まれて負けたなら死ぬことと思えと東京大学の理学部第一期生として、数カ月後に招かれるメンデンホールなどに学びます。イギリスに留学して戻ると東京大学の教授になり、しばらくして日本人最初の国際度量衡委員になります。

東京大学理学部で数学を教えていたのは後に度量衡器検定所所長もした菊池太麓であり、物理を教えていたのは会津藩家老の子で白虎隊の隊士であった山川健次郎です。

明治のはじめのころ東京大学の理学部の教授などが中心になって日本の度量衡制度をつくりあげることになりました。

国際度量衡委員の田中舘愛橘、その教え子の長岡係数で有名な長岡半太郎です。田中舘愛橘に「元気にやっているか」と声をかける仲の寺尾寿、そして寺尾寿をして「物理学普及の志士仲間」

と呼ぶ高野瀬宗則です。

　このように明治のはじめのころの理学と度量衡は東京大学教授とその卒業生などが中心になってつくられたのでした。この人々は武家のでであり、武士道の精神によって仕事にあたったのでした。

　田中舘愛が南部藩の藩校で一緒に学んだ原敬はのちに東京大学の法学部の前身の学校で学びます。寮生活の改善を意見すると放校になります。庶民宰相と呼ばれる原敬の先祖は南部藩家老職にあります。原敬は長男に兵役が免除される制度を利用するために分家したために平民の地位になったのでした。

　同じ南部藩の藩校で田中舘愛とともに学んだ原敬が後に法律などを扱う役人になり政治の世界で活躍しました。田中舘愛が学んだ開成学校では、少し前には俳句の正岡子規がおり、日本海海戦の作戦を立てた秋山真之は正岡子規とは松山在住時からの友人で松山中、共立学校で同級だったのです。東大予備門では正岡子規と夏目漱石、南方熊楠、山田美妙らと同窓でした。南方熊楠は和歌山の人でした。

　同じ東大予備門などに学んでいた田中舘愛、原敬、正岡子規、夏目漱石、秋山真之は道を分かれて新しい道をつくっていくのでした。